久慈農林水産高等学校にて
昭和四十一年十一月七日

本日は文化祭でおめでとう。私が初めてこの壇上に立ったのは、ただ今校長先生がおっしゃったように昭和二十七年七月頃だったと思います。着任式に来て生徒諸君に最初の挨拶をしたのに「諸君は勉強するな」と、こういう意味のことを言ったようです。式が済んでから各教室のホーム・ルームで「勉強するな」と校長は言ったがどういうのだろうと議論が出たそうであります。そのことは、なつかしい私の思い出というのは余りに昨日のことのようで、今日ここに同じ態度で立っているのであります。

疑うということが勉強の入り口、疑いのないところには勉強はない。私も日ごろ自分のわからないところ、疑問としているところを、言わば諸君らにお手伝いを願って、悪く言えば諸君らをだしにして勉強させてもらいたいと思うのです。一時間ほどお付き合いの我慢をしていただきたい。そのかわり、さっき校長先生がおっしゃいましたが、私が自分の勉強ですから、諸君は自由に話をするなり、居眠りするなり、それは皆さんのご自由で結構です。決して窮屈な思い、あるいは何らかの条件付きのもとでの一時間ではないようにお願いしたいと思います。

「文化」というのはどういう意味であろう。いろいろな定義はあるだろうと思いますが、私は「表現」とい思う。われわれはこの世にどこから来て、どこへ去って行くのであろうか。確かにあったはずの昨日が跡形もなく消えてゆく。明日へ手を伸ばそうとしても明日をつかむ訳には行かない。生きるということは不安である。人は自分の存在を自分で確かめたい。「夕焼け小焼けの赤トンボの歌」、竿の先に止まっている赤トンボ、じっと動かないと思っていると、ふっと飛び上がる。いま飛ぶかと見ているとじっとして動かない。そこにあるのは瞬間であるか、それとも永遠であるのか。

今日、いまここに自分がいる。しかも、いまのその自分がそのまま自分でいることに耐えられない。その自分からなんとか離れたい。いま、諸君らはここに集まっておられますが、ここに居ようという気持ちと同時に、そのうらから、いますぐでもここから出て行きたいという

気持ち、この実感はだれにでもあるはずだ。生きているということはいつでもそういう意味での不安である。しかも、皆さんがここにこうして座っているということは、その不安をなにか乗り越えたい、そういう力もそこにある。昨日へと消えてゆく自分が、そのまま明日へと新しい自分を創造してゆく。創造してゆくことを通して、自分の存在を確かめたい。そういてゆくより他ない。この創造の働きを「表現」と名付けたい。この「表現」の結果が文化である。とまあこういうように極めておおざっぱな言い方ですが、言えるのではないかと思う。生理学の方でご承知でしょうが、大脳生理学が最近非常に発達したそうである。人間の大脳の皮質に上層部と下層部があって、上層部に創造の働きの中心がある。動物にはこれがない。動物には本能の働きはあるけれども創造の働きはない。その意味で文化は人間独特の領域で、私も今日、文化祭に出席させていただき、この壇上に立たせてもらうことによって、私が人間であるということを確かめられている。これはお礼を言わなければならない。

次に、宗教の一般的な意味。人間がただいま申したように、自分の存在を自分で確かめるため、自己創造してゆく。換言すれば自己の表現が文化であると申したましたが、確かめること、すなわち生きていることの不安を乗り越えて生きてゆくこと、あるいは同じことだけれども、生きていることそのことに安心すること、あるいは安心して生きてゆくといっても同じかも知れませんが、安心することを、いろいろの方法がるでしょうけれども直接に、単純に、率直に目的とするものが、それが宗教の働きである。宗教は個としての自分と全としての存在全体との、この両者の関係である。安心して生きるということは、何らかの意味で個と全とが、自分と世界とが、一つになることだといえる。大きく言うならば自分の命と全体の命とが会い通いあること、自己をその意味で世界の表現と見る。世界を自己の表現と見る。それが自己と世界との生きた関係である。小さく譬えてみると諸君はいま制服制帽を着るということによって、この高校の一員であるという自分の存在に安心して生きてゆかれる。制服制帽のあるところにこの学校があるし、この学校のあるところに制服制帽がある。このことは諸君ら生徒に学校があるということである。入学試験にパスしたというだけではまだすっかり落ち着かない。なんだか学校に入ったような入らないような気がして、本当かなという

ような気がする。入学式に参列し制服制帽をちゃんと身につけたとき初めて今日から自分はこの高校の生徒であるという安心がでる、安心が生まれる。自信がつく。たとえですが、諸君とこの学校との関係を、人生という七十年の学校、七十年の人生という学校における生徒とこの世界、七十年の存在全体との関係に押しおよぼしていったらどういうものだろう。

そこで宗教を理解するのに教義や議論を必要とするかもしれないが、むしろ信者の体験に直接触れるのが一番の近道だと思われる。ただし、信者の体験を読んでみると、たとえばキリスト教の話と仏教との話は非常に違う。個々の宗教は内容的にも形のうえでもそれぞれ違いをもっている。つまり宗教にはそれぞれの歴史的な身体がある。しかも一方から言うとその根本的な骨組みを抜き出してみると、そこに何らか共通した論理があると前提しなければならない。その共通した論理とは、全体としての世界と自分との二つのいのちが一つになることだ。

ところで、その一つになる型、たとえば、キリスト教と仏教とについて申しますと、キリスト教は世界の創造が先にある。いわば世界の舞台装置が先にできあがってしまっている。その中でいわば観客、あるいは俳優の一人として、一人ひとりの人が生きている。世界が創造されるということは、創造主としての神が前提とされねばならない。その意味で仏教は神がないから無神論だとも、言葉としては言われることがある。つまり世界と自己との関係でキリスト教の方では、世界から自己に向かっている。神は世界を創ったのであるから、世界の上というかあるいは外というか、世界から離れないのだが、しかし世界の中に入れるわけにはゆかない。しかし、みずから創ったのだから世界の主人であるから、中に入っても外にいても同じだといえば言える。自己はところで、その中にある。神と自己との関係はそこで一つになる。

それに対して仏教は、向こうのものを前提としない。自分がこの中心に向かってゆこうとする。自己創造と世界創造　キリスト教の世界創造ということを借りるならば　とが同時に進んでゆくのだ。実現してゆくのだとでも言わなければなりません。この両者の一致に自己の自主性、主体性が成り立つ。これは自由という言葉で言い直してもよいでしょう。自主性と主体性、自己をこの世界の上で見いだすことは、同時に他を見いだすことである。他の発見である。あるいは自分の主体性を承認

することは、他を承認することである。これは自他平等である。こう言っていいでしょう。自己と世界の創造の働きの上に自由と平等とが生まれてくる。ただし、さきに申しましたようにキリスト教と仏教との違いは、世界という前提をおいて、その中で神と人との関係を考える。これは対立関係である。仏教はこの全体的なものを先に前提としないから、換言すれば自己に対する枠　　存在全体の枠　　を前におかないから対立がない。これが両者の性格の根本的な違いだと言えると思います。そこで、いま皆さんにお渡ししたプリントを見ていただきたい。

はじめに、鈴木大拙先生の『無位の真人』についてですが、これは自分が自分を創造するということはどういうことかということを、仏教的に表現しているという意味で読んでみたい。一番初め宗教の目標は、人の上にある。その人が見聞するところの客観的境地、他に目をくれてはいけない。まず、人がどうしてそこに自分自身を生み出し、生まれ出すかというところが問題だと。

六行目、「臨済、ある日の上堂に」　　上堂とは先生がこの壇上にあがって生徒と話をすることですね。「赤肉団上に一無位の真人いる。常に汝等諸人の面前から出入している。まだ証拠しない者は看よ。看よ」　　お前達の顔から出入りしているぞ。自分の中から自分が出入りしているのを、お前自身は気が付いておらぬのか。気が付いておらぬ者は、はっきり看よ。看よ。一体この本当のお前の中から出入りしているお前は一体何だ、と。まあそういうように申しましたら、一人の弟子がその中からつかつかと前に出てきて、「いかなるか、これ無位の真人ぞ」と。その本当のお前というそのお前、本当の俺というその俺は、それは一体誰だ、と。そこで禅師は講壇からとんでおりて、弟子の胸ぐらおとらえて「言え。言え」と言った。弟子は一寸とためらった。師は突き放って「無位の真人、それなんらの乾屎けつぞ」と。糞かきべらと言って、そのまま帰ってしまった。赤肉団というのはこの肉体のことである。

「一無位の真人」の意味は深い。無位とは階級のないこと、数量で測られないこと、対目的、相関性の条件を超脱したということ。次の「人をして、人たらしむる」というところ、真の人というのは普通に言う人のことを言うのでなく「人をして人たらしめる存在理由とも言うべきもの」いわゆる主人公だと。

それから次のページの三行目、臨済は自からの全存在をまる出しにして追ってきている。実に真剣勝負である。

ぐずぐずしてはおられない。一寸のすき間もない。そこで皆の中から出てきた一人の坊さんが「それはどういうものですか」などとまごまごと質問されたのでは、まどろかしくてしようがない。胸ぐらをつかんで、「さあ言え、さあ言え」と追った。

こういうように自分が自分を創りだしてゆく世界の舞台の中に、自分の中から自分を生み出してゆく。それが仏教の直接のねらいなのである。

それではキリスト教の方ですが、小池達夫教授の『不断に自己を突破する』のプリントを見てください。信仰はどうだこうだということは問題でない。ただひたすらキリストだけを当てにするだけである。直接キリストと勝負するのだ。ここでは神が出ておりませんが、言わば神はこの世界の後ろにいる。表に出てきたのがキリストである。神は見えない。直接見えるのはキリストである。このキリストと自分との直接の勝負である。このキリストが神の現象体として絶大な力であるから、これに圧倒され彼を信ぜざるを得ない。信受しないではどうにもならない。というのが、強いて言えば自分の信仰だと小池教授はいう。　それから「自我の解放から」というところ。キリストの門は十字架である。これはノックなどした位では開かれない。体当たりだ。そこから霊光がさしてくる。霊性を持ったこの光は人を生かす愛の生命、聖霊であった。そこに自我からの解放が出てくる。本当の自由がある。乾坤を、世界を自由に歩くような調子である。

一番終わりの「聖霊が示す大ドラマ」。神がこの闇の世に光を投じてこの闇の世を光の世界にかえようとした大ドラマ。それが聖書だ。この活劇の中に身を投げ入れて劇中の人物となり、神に、キリストに呼びかけられ、つかみかけられる体勢で聖書にぶつかる読み方。いつも神がむこうに、それが相手になっている。神と人との直接の対決である。いつも、そこに対立関係が出ている。自分の中から自分が生まれでるという仏教に対して、キリスト教の方はいつも神が向こうにいる。神との対立関係である。

このことはいろいろな意味でキリスト教の性格上マイナス、プラスの両面を生んでいる。同時に仏教が対立関係の面を書いていることがプラス、マイナスの両面をも生んでいるのである。このプリントの資料は、以上にいたしまして次に移ります。

世界と自分とがひとつになれば間違いはないのだが、ひとつになれない。これはどうゆうわけだろう。どこに根本的な原因があるのであろう。これは生と死が一番根本的な原因である。

そこでキリスト教は生と死をどのように考えているか、ひと口に言えば人間存在を神が外からつかまえている。人間存在に対する大きな枠をはじめからはめてしまっている。換言すれば人は死すべきものとしてとらえられている。従ってどうして、この死を克服するかということが、キリスト教の課題である。死すべきものだから生が前提とされている。この生は最初の全体者、神から恵まれたのである。本来、神が全世界を創りその中に人もあらゆる物をも創ったのだから、神の命が人の命につながっているはずなのである。それならば、なぜ人は死ななければならないかというと、ご承知のようにアダムが神の言葉に背いた。それが罪である。神に創られた人間がおとなしく黙って神の中におればよかったのだが、神とはなれて背いた。「生意気にも」と神からは言えるでしょう。神からはなれ、人間独立宣言をしたわけである。

この気持ちは、学園の中における生と諸君にもわかるだろう。教師の立場からは、学校の言うことはおとなしくきかなければならん。ところがそう言われると、なおさら自分に中から「俺は生徒だ」、学校の生徒であると同時に、学校の中から自分を独立させたい。それがどうかすると問題になる。つまり罪だということになる。神に創られた人間が神の言葉に背いて人間たらんとしたところに、罪が始まったと言われている。死というのはその罪を償うための死である。

もうしわけないが、私も校長時代に一人か二人の退学者を出したことがある。生徒が学校のきまりに従わなかったとき生徒であるという命をやめさせられる。これが死である。

カソリックの大きな立て札「死は罪の償いである」が街頭にあったことがある。つまり死は罪に支払う代価である。人は神によって創られた、つまり世界がすでにそこにあるのだから、世界の初めがあるはずである。初めがあれば世界の終わりもある。そこで一旦死んだ。死ななければならない人間は、最後の世界　　この間が歴史ですね　　の歴史の終末において、そのまま死んだら永遠に浮かばれない。そこはもう世界の最後だから、それから後自分だけが残っているというわけにはいかない。世界の最後に、歴史の終末に復活させられる。それが神

の姿である。したがってこの神の愛はうちからいうと裁きである。愛と裁きとをひとつに言い表した言葉に「汝の敵を愛せよ」がる。愛するのであるが、愛の前提として敵という裁きをしている。事実、歴史的にはキリスト教は人間と他の生物を区別した。他の一切の生物は人間が生きるための手段である。人間に動物は奉仕すべきであるという考えも、ある宗教でそれがなくされたのは、ほんの五年、十年前のことである。さらにまた、ある宗派は他の宗派を認めない。異端邪説という不寛容さ、愛を標榜する宗教の本質が、それゆえにかえって不寛容な激しい態度をとる。カソリックの法王が他宗派を認める宣言をしたのも確かこの数年前のことではなかったと思う。そういう非常にはっきりした特徴がある。

先に申したように、神は世界の後ろに居る。直接に出てくるのは神が肉体をとったキリストである。神はこの世界の中にキリストを通して入ってくる。入ってきたけれども、それにもかかわらず、なお、神は人を外からとらえている。外からとらえるということは、これ全体に歴史性を与えること。つまり、この存在全体に目的を与えることです。目的はいつも全体的なものが与えられなければ目的は出ない。たとえばこの高校三カ年という根本的な規定があって、はじめて卒業したら何になるのだということになる。学校に入ったのだが何年で終わるのかわからないというのでは、目的が生まれてこない。目的はいつも全体が与えられた範囲の中で決まってくる。つまり歴史性がそこに生まれる。いつも神と人間とが人格的交渉をもつ。そこにキリスト教の倫理性が出てくる。人格的な決断、神に対する人間の倫理的な決断がそこに要求される。そういう特徴がある、このように言われている。

次に仏教ですが、私自身よく考えないと、どこかで混乱するおそれがある。よく考えながら聞いていていただきたい。

キリスト教では人は死すべきものと言ったのに対し、仏教では生死すべきものとしてとらえる。死すべきでから神から何らかの意味の裁きを受けている。こちらは裁く人はないのであるから、それ自身われわれは生死するものである。すべての存在をふくめて始めも終わりもない。創造主が世界を創ったということがないのですから、始めも終わりもない。言わば、歴史の始めも終わりもない人間存在を「内（うち）」から　　キリスト教のように外から枠づけるのでなしに　　自分の内から主体的に自

覚する。そういう立場である。生死するというのは、生と死とが二次元的に考えるのでなく、生死そのもの、生死流転、生死はひとつ、生死がそのまま流転する。「生死流転」の自覚である。この自覚を通して生死を超えようとする。

無常とはただものが無くなるということではない。有ったものが無くなったというのではない。普段に有ったものが無くなり、普段に生死する。生から死へ移るのが無常でない。生死するということが無常なのである。生死そのものを脱するということ。キリスト教では生死を克服するという。生死に打ち勝つという。仏教では生死を超える、抜け出すという。復活ではない。克服ないし、復活でなしに生死そのものの中に、生死そのものに即して、何と言いますか、無生死の自覚であるということ、煩いは生死すると存在としての人間が本来、無生死であるということである。生死というものがずーっと連なって動いてゆくのだという見方はまだ外にものを置いた見方。対象的な見方である。生死そのものに何か執着がある。無いものを有るように目の前におきたい。それから離れたくないそういう執着がある。換言すれば生死がまだそこに対象化されている。自分と生死との間が離れている。自分の外に生死が動いてゆくかのように、生死流転ということを考えやすい。そうではなく、生死的な生そのものが無いのだという無の自覚。生死を対象的に置くのではない。生死を主体的に、生死的な生そのものの本質が、それが死なのだ。

ちょっと話をたとえてみましょう。諸君が今日学校にくるとき、財布をもってきた。いつもは持って来ないのだが、今日は文化祭でお汁粉ぐらいあるだろうから食べようといつもより多く持って来た。学校に来てみたらどっかで落としてしまっていた。有から無、有ったものが無くなった。「しまった」と思う。友達がいて「おい。どうしたんだ」と。友達は「有ったものだ無くなった」と横から眺めている。つまり対象化している。友達がであるから真剣になるほどのことではない、自分が落としたのでないから。しかし、落とした本人にしてみれば「あっ。しまった。無くなった」と気が付いたときには有から無への「無」でない。有無そのものである。よく国語で「有無を言わさず」ということがありますね。「有無を言わさず捕まえた」とか、あそこなのだ。他人の事なのだと見ている間は、有るところから無いところへ、有から無への移り変わりを他人事のように見ている、対象化

して見ている。落とした当人にしてみればそうでない。「あっ。しまった」というその直下に、有無そのものをそのまま捕まえている。しかも、そこに何もないのだ。結局、どうせもう初めから持ってこなかったと思ったら慰めがつく。諦めようとする。そこにこの無が出ている。横にいる友人にはそんな実感はでない。なんだ。馬鹿らしいな。諦めても諦めなくても、無いものは同じだと第三者の友人なら言える、平気で言える。

ところが諦めるには諦めない前と諦める間とに、人によっては血の涙がでる。たとえ百円札一枚でもあだおろそかな金ではない。家でお母さんが血の涙を流してやっとつくったお金かも知れない。これは涙なしには聞くことのできないことだろう。「本来、ない。無なのである」、これはよくよく真剣な場合でないと言えることではない。と、まあこんな譬えでそのへんのところを推察できるかと思う。

それを本来、生死がないという。その境地を大死という。もともと無かったと思ったら諦めがつくというのは、単に有るものが無いという諦めでなく、もともと無かったのだと思うのだという境地、新しい境地、これが大死だ。よく「大死一番しろ」などという。「清水の舞台から跳んで降りた気持ちになれ」などという。大死とは死を死にきることである。死を死にきることによって本来の生にたちかえる。大死一番して本当に自由な生きる世界に帰る。「自分の財布が無くなったのだ」と思うのは個人的な世界である。しかし「もうどうせ、こうなった上からは、もともと無かった金だと思うのだ」と言ったときには、もう個人を脱している。これはもう共通の問題である。つまりその場合は個人の立場を超えている。個人の主体性だの問題ではない。

一人自分だけの体験であるが、その体験は友人全体の、おそらく財布を持っている人達全体の問題である。世界全体の共通の問題である。個人が大死したということは世界そのものが諦めたということだ。個人が生死から脱したということは生きとし生きるものだけでなく、山も、川も、雲も、水も一切あげて生死を脱するということだ。自己の自覚が、個人の自覚がそのまま世界の自覚となる。個人が救われることは同時に世界が救われることである。と言っても個人の他に別に救いというものが、そこにあるのではなしに、個人を通して世界も自覚される。ここに自己と世界との一致がある。本来、自己と世界とが根源的にはひとつであるという境地。一方では絶対の主体

的であるものが、絶対的な客観性を持つ。

こういう境地を仏教では「生死即涅槃」といっている。あるいはこの境地を「仏性」と言っている。生死を本来の無生死の立場に自覚うことが仏性である。自己の生死を脱することにより世界の生死も脱する。自己と世界とが生死を脱したところにおいてひとつになる。これが仏教の生死に対する考え方である。

次に道元禅師と親鸞聖人の違いと申しますか、同じ仏教の中の二つの型について。先に言った生死を脱するならばどうしたらよいのかという具体的な問題について。

結論的に言えば禅宗的な人間の表現が「坐禅」であり、浄土真宗的な人の存在の表現が「念仏」であると言える。禅宗的な生活は坐禅のよって、真宗的な生活は念仏によって象徴されるとでも言いましょうか。

表現であるから目的ではない。それ自身の表れであるから、坐禅することによってどうしようというのではない。手段ではない。念仏することによって、病気を治そうとか金を儲けようとか、そういうのじゃない。その人間そのものの存在の表現なのだから、そこに安心して生きてゆくことのできる姿なのである。

この二人がどのように違うか。たとえば、ロウソクが燃えている。この光明の方を自分の姿と見たのが道元禅師である。この光が明るければ明るいほど。それ自身の暗さ、自分を闇そのものとつかんだのが親鸞聖人である。同じ一つの存在を一方では光明と見、一方では光明であるがゆえにかえって全くその反対の闇と自覚した。この二つの両極端。「生死を超える」という問題で、道元はまっしぐらに生死そのものの中に入っていった。生死の荒海の中に素っ裸になって飛び込んでいった。そして本来の一番底まで到達した。ここが入り口であると。これが生死の大海である。最後にここを突き抜けた。底を脱した。生死を脱したのだ。その姿が坐禅である。

親鸞聖人は道元禅師のように素っ裸になって、ただ坐禅一筋にどこまでも飛び込めばよいということは、よくわかっているのだ。よし飛び込もうと思って五年、十年飛び込むウォーミング・アップをした。ウォーミンング・アップというのは飛び込んだという前提のもとにするのですね。始から勝負にならぬというレースにウォーミング・アップする人はないだろう。ところがそうおもってやってみたところ、やればやるほど飛び込めない自分に気が付いてきた。これは困る。一切ご破算だ。しかし、やれないといって、じっと岸に立っていたのでは生きて

いるという意味がない。なんとかここでやれないのだけれども、やれる道はないのであろうか。やりたいという欲求、なんとかしてこの生死の大海を乗り切りたいという欲求があればあるほど、ますますやれないということがわかってくる。という心を次のような言葉で表している。「悪障さらにやめがたし」、あるいは「虚仮不実」と。

たとえば、諸君はこの学校に入って、うんと勉強するとか、また、いい成績をとらなくても自分として悔いのない勉強をして三年間を通したいとか考えている。ところが二つの型がありますね。わき目も振らず勉強をしていける人、それからやろうと思えば思うほど何だか頭の中に邪魔が出て来てやれない人、自分の体のこと、周囲のこと、いま生きていること、明日のこと、将来のこと、いろいろのことが気になる。それで勉強が手につかない。真面目になろうと朝晩励ましてみたのだけれども、真面目になろうとすればするほど、不真面目な心が次から次へと出てくる。これでは勉強ができない。つまり、生死を逃れようとすればするほど永遠の昔から自分の体に巣食うているいろいろの煩いがその自分をおさえつけようとする。がんじがらめに自分を縛ってしまっている。それを「罪業」という。この「罪業」はキリスト教の神に対する「罪」ではなしに、われわれ人間が自分自身の中にもっている、自分で生みだしてきた罪業なのですね。こういう「罪業深重」なものは、どんな方法、はからいをもってしても自分の力ではあの生死の大海を乗り越えることはできない。真っすぐに海の底を突き破ってゆくことはとてもできない。飛び込むこと自体もできない。いや飛び込む前にすでに自分は溺れかかっているのだ。諸君は三カ年の学校生活の中で、あっぷあっぷしている方なのか、抜き手をきってタイムを稼いでいる方なのか。そういうマイナス面を契機として、プラスとして突き進めてゆけるならば問題はない。「他力」の世界がここに出てくる。

この「転」の契機が親鸞聖人にどういう形で出てきたか。

歎異抄はその転の内容を懇切ていねいに書いている。生死から脱の願い（自分の顔）が、どうしても駄目だと絶望に陥ったところで、かえって願いに対して思いがけなくも、むこうから大きな呼びかけが来る。生死の海に溺れている自分は「たすけれくれ。たすけれくれ」と叫び声をあげている。しかしたすけれくれと言いながらその限りなおどこかにそれでも何とかして自分の力で上が

れるのだという意地っ張りがどうしてもわれわれにはある。困っている人を助けてやって本当に感謝されるということは、そうあるものではない。半分は有り難うと言いながら半分は余計なおせっかいだなあと思う気持ちはわれわれ自身にもないわけではない。ところが「もう駄目だ」、「駄目だ」という声さえ出なくなった絶望の自覚の底から、むこうの方から「救おう」という呼びかけがある。「お前を救わにはおかないぞ」という声がある。これが「転」なのである。

そうするといままでの絶望はもう意味がなくなる。その声に「ああ、そうか」とそのまま受け入れるだけである。自分の全存在をあげてその呼びかけを受け入れる。それが「他力」の本質なのである。その他力の意味を親鸞聖人のお言葉を通して弟子の唯円が筆記されたのが歎異抄です。今日は読んで、その内容にまで立ちいたれませんが、一通り読むだけ読ませていただきましょう。（以下第一章から第十章まで朗読する）

最後に先の申したように、キリスト教の表現は「祈り」である。道元禅師は「坐禅」である。親鸞聖人は「念仏」である。自己の存在が存在自身を確かめている姿、あるいは確かめられている姿、自己と世界とがなんらかの意味で一つになっている姿、と言っていいだろうと思います。この三つのものに共通している感情を言うならば、それは現実の非常に複雑な人間生活の表現が、圧縮され凝固され、昇華されて、最も簡単なもうこれ以上ないという単純な姿になっているということである。

祈りは神との「対話」であると言えるならば、念仏は「独語」である。自己が自己に語りかける。坐禅は「沈黙」である。まあ無理かもしれないがこのように区別ができるかもしれない。これら全体に通ずるものとしては、生まれているということに対する感謝の念だと思う。ただしこの感謝は、先に諸君らは財布を落としたあと、悔しいなあと思って一晩も二晩も眠られぬほど胸がぐらぐらして人の知られぬ所では一時間も二時間も泣いてみてから出てくるもの。つまり恨み、妬み、悲しみ、憎しみ、その他いろいろ、非常に複雑な内容を通ってあとで、「ああ、結局もともとなかったものと思えばいい」という「無」の境地に出てくる「一種の安心」「やすらぎ」であり、それは誰にともなく、つまり自分の存在そのものに対して奥から湧いてくるものである。そういう意味での感謝の念である。

どうも、有り難うございました。